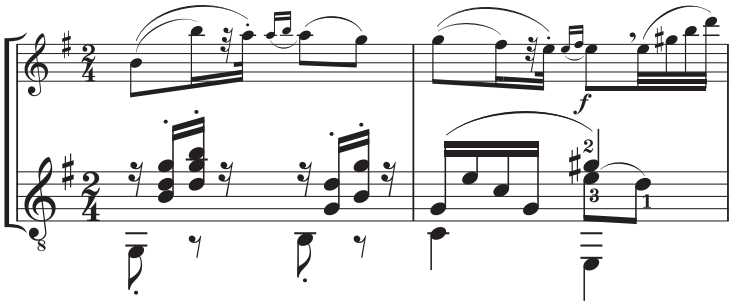
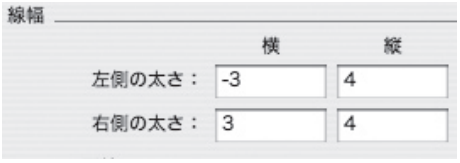
Finale のスラー

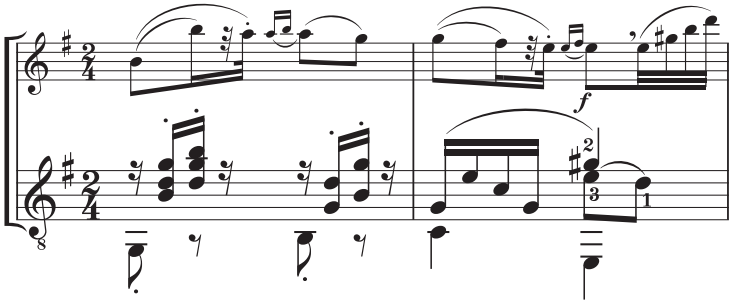
譜例は私の最近の編曲で、フルートとギターの為の作品です。このスラーをよく見ていただきたいのですが、装飾音に付くものと短めや長めのものとで太さと鋭さが異なるように描いてあります。上段のフルートパートは五線サイズ自体が縮小されているのでスラーも自動的に小さく細くなりますが、そのフルートパートの中でもそれぞれ異なったデザインのスラーになっていることがお分かりかと思います。



デフォルトではこうはなりません。Finale ではスラーの太さや先細りの度合いをただ一種設計できるだけで、それがファイル全体を規制します。状況に応じて個別に変更できるのは位置と曲率だけです。そこで一計ですが、同じ部分に何個でもスラーを付けられることに着目して、太くしたい所では二重に付けて調整しました。その為に基本設定を細めにしてあります。「スラー詳細設定」の「横」の数値が先細り具合を決定しますが、図のように左側に負、右側に正の数値を与えると鋭くなってきます。ただし、あまり大きな数値にすると出力時にカスレが出ますので、そのあたりは経験を積んで覚えるしかありません。



普通のデフォルトファイルではこの「横」の数値はゼロ、「縦」が５～６くらいでしょうか。それは最大公約数的に無難な結果を狙ったもので、どう頑張っても表情豊かにスラーを描き分けることはできません。次の譜例がその普通の描き方です。比べると少し平板に見えないでしょうか。



スラーを二重、場合によっては三重に重ねて付けるには少し訓練が要ります。始終点を動かさないなら簡単で、上に重ねた方を少しドラッグするだけで太くなります。けれども必要に応じて端を動かせば、次に重ね付けするスラーの両端をそこに合わせなければなりません。これがけっこう大変です。

Mac OS X と Finale Ver.2006 のコンビで初めて実用性が出て来た方法だと思うのですが、以前のバージョンではモニターでの見え方と出力されるものが違いすぎて、たぶんこれは不可能でしょう。Finale の最近の進化は素晴らしく、2004 では発想記号の初期位置設定方式、2005 ではレイアウト関係の小節スペースや臨時記号スペーシング等々、そして 2006 に至って Mac OS X のグラフィック技術との親和性が飛躍的に改善されました。以上はもちろん最新の 2007 にも生かされています。

手持ちの解像度 1200dpi の PostScript プリンターでの試験では、少し出力の方が太めに出るようですが、EPS 生成にも問題はなく、時間を惜しまなければ少しの練習でものにできる技術だろうと思います。ただ、残念ながら Win 版ではこの画面表示の改善はなく、おそらくは Vista 完全対応の次期 Finale に期待したいものです。

ある楽譜浄書スクールの講師を勤めていたころ、大ベテランの手浄書家の方とよくパーティで顔を合わせ、お互いにウイスキー好きなこともあって、いろんなお話を聞かせていただきました。「君、楽譜はスラーだ。スラーが命だ。マウスの操作に魂を込めるんだ」と仰っていたのが、次の年では「いや、スラーが良くない。ソフトが悪いんだから仕方ない」という話になりました。手練の手浄書家もコンピュータソフトにはあまり詳しくなく、楽譜作成ソフトの欠点の一つに気づくのに少し時間がかかったということでしょうか。

スラーやタイといった曲線の基本設計に幾つかのオプションが用意されるようになればこの問題は一気に解決ですが、そうなるまではこのマニアックな方法を駆使してみたいと目下訓練中です。魂を込めたマウス操作をもってすれば大した難事でもなく、昔の良いお手本を見て研究中でもあります。

2007 年1月　　梅本雅弘　記